

長い伝統を持ちながら、夏場でも詰め襟の学生服や羽織、はかまが欠かせない姿に、「古くさい」「ださい」と思われがちだった応援団。県内の大学では、廃部の危機に直面する団も多かったが、このところ復活や立て直し相次いでいるという。「先輩と後輩の上下関係が厳しい」「練習がきつい」などと、クラブやサークルの活動を敬遠する学生が増えるなかで、なぜ今、応援団なのか。

昭和20年8月6日 悲劇を乗り越えて緑ある文化空間を創らんと不死鳥のごとく甦りしこゝ 我学ぶ君学ぶ彼の人学ぶ 天下に冠する広島大学。

昭和20年8月6日 悲劇と跡を継いだ。部の恒例行事で真冬の川に飛び込んだ際、エールを送ってくれた応援団部員の姿を「硬派でかっこいい」と感じたからだ。

夜の広島大東広島キャンパスに、第18代応援団長、日名子亮介さん(23)の口上が響く。学生服を着込み、鉢巻きに白い手袋。後ろに加登本仁さん(21)、森浜直之さん(22)ら5人の部員が控える。全員が他の部との掛け持ちだ。

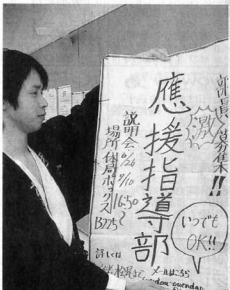
3年前、当時の団長の卒業で部員がゼロになると知り、合気道部の日名子さんが「兼務できるなら」

「選手は、応援団が頑張れと声をかけてくれるだけでいいんです。とにかく団が存在することが大事」加登本さんは高校時代に、応援団員だった。進学後に部員不足を知り、「経験者の僕がやらなければ」と使命感で入部した。「また入部希望者の期待に沿える組織になつていけないのが悩み。応援の仕方をもっと派手にすればいいと話す。



月明かりの下、演舞の練習に訪む日名子仁(中央)ら広島大応援団。夜のキャンパスに威勢のよい声がかかる(東広島市)

よみがえる大学応援団



44年の伝統を持つ広島県立広島原高でも、廃止に直面した応援団に参加。団長を務めた3年生の体育祭で、団を中心に全校生徒が一体となり、校歌を歌った感動が忘れられない。進学した大学で再び、応援団復活にかける。

「勝てた」

かまを積み込み、手作りの勧誘ポスターを張る岡さんの期待に応えるように、1人の新人が入部した。松尾洋邦さん(18)だ。

松尾さんは出身の長崎県立高原高でも、廃止に直面した応援団に参加。団長を務めた3年生の体育祭で、団を中心に全校生徒が一体となり、校歌を歌った感動が忘れられない。進学した大学で再び、応援団復活にかける。

「応援団は古くから、だいたいイメージでも、応援するというのは、人の役に立つこと。そして、自らも成長できるんです。」

酸素たっぷり

疲労回復や新陳代謝促進に効果があるとされる「酸素」を高濃度に含んだミネラルウォーターや、缶入り酸素、酸素バーが人気を集めている。

広島市中区のコムビエンスストアでは、高濃度の酸素を含むミネラルウォーターが、通常のものより約